

曾我蕭白の朝田寺杉戸絵

—「獺図」を中心に—

Milosz R. Wozny (ミウオシュ・ヴォズニ) (慶應義塾大学)

江戸時代後期の奇想派画人・曾我蕭白の作品に、「獺図」という格別に珍しい題材をとりあげた杉戸絵がある。この獺とは実在の動物ではなく、中国から日本へ伝わった架空の動物のことであり、蕭白の時代には人の悪夢を食う、あるいは病魔を退ける吉祥の生き物として広く知られていた。ところが、蕭白が描いた獺の姿はなぜか非常におどろおどろしく、あたかも妖怪のように描き出されているのである。

本作例は、三重県松坂市の朝田寺に伝来する蕭白の筆にかかる唯一の杉戸絵作品群のなかでは、その中心となる一図でもある。彼は二枚の杉戸を利用して、その裏表に「獺図」「槇に旭図」・「鳳凰図」「菘に兎図」をとりあげることで、あまり類例のない題材同士の組み合わせを試みている。様々な観点から興味深い作品群ではあるが、先行研究はそれらの制作年代の推考や個別題材の解説を重ねるに過ぎない。そこで発表者は、江戸期における獺の図様と意味を総合的に考察した上で、「獺図」にみられる蕭白独自の題材解釈、そして、これらの杉戸絵が一組として意味するところを明らかにしたい。

発表者が確認できた江戸時代の絵画・版画・絵手本の挿図など計十九点の僅かな資料からは、狩野永徳や常信の「唐獅子図屏風」に代表される狩野派の唐獅子図の図様が、江戸時代における獺の一般的なその基となったと推定される。その一方で、「獺図」に認められる蕭白のオリジナリティーとしては、思い切った視覚から捉えた獺の姿形、あるいは鼻や目の禍々しい描写にあるとも考えられる。吉祥の動物であるべき獺を、あたかも妖怪であるかのように演出することで、蕭白は往時の獺に対する既成のイメージを覆す絵を描いたのである。

さらにまた、これら杉戸絵全体を検討していくと、蕭白は様々な主題を意味ありげに組み合わせたことがわかる。「獺図」などの画中に描かれる植物などの題材によって、杉戸絵には移ろう四季の流れが組み込まれ、同時に日月による昼夜のサイクルをも織り込んでいる。さらに、「獺図」と「鳳凰図」については、人々の悪夢を食うと認識されるゆえに夜と結び付けられる瑞獣(獺)と、朝日と組み合わせられる瑞鳥(鳳凰)との対比がおこなわれていることもわかる。往時一般に知られる吉祥の動物類では、獺と鳳凰のみが特定の時間と深く関係しているため、蕭白は瑞獣と瑞鳥といった単純な対比のみならず、夜と昼、また月と太陽とを対比させる企てにも同時に成功しているのである。とりわけ、「獺図」にはみるものを驚かせようとするさまざまな試みがよみとれるが、蕭白はそれを奇怪な描写にのみ頼ったのではなく、この杉戸絵作品のなかに様々な題材を巧みに組み合わせることによって、全体として自らの独創性を重視しつつ、鑑賞者のさらなる好奇心をも誘うことを意図したものと考えられる。

なお、以上の考察に加えて、杉戸絵各図が担うべき役割、また、各杉戸絵の保存状態から判断して、従來說かれるそれらの位置が本来の位置とは異なる可能性をも、提起したい。